

赤岳，権現岳（2704m）へ

岩井 淑

10月15日（日） 晴れ

赤岳鉱泉小屋で薪ストーブを囲み，ワインを飲みながらの3人の会話。
3人とは，まだあどけなさの残る23，4才の小屋番と大学4年生と私。

—この小屋，新しいようだけれど建て直したの？

・いや，内装を貼っただけなんだ。貼り替える前はきつたない小屋でね。ほら，あそこの柱なんか昔のままだろう。

—小屋には電話予約して来る人と，そうでない人との比率はどの位なの？

・うん。大体，半分くらいかな。連体なんかだと予約が3分の1くらいかなあ。だから食事を用意する時が大変なんだよね。昨日は20人泊まったけど，今日は5人くらいかな，と思っていたら11人だから，食事たりるかなあと思っているんだ。

—この小屋は通年だろうけれど，今ごろは小屋番て1人なの？

・うん。いつもは2人なんだけど，1人は下へ下りているの。

—ストーブを燃やしているけれど，何時頃から出すの？

・大体，今ごろからだね。これも1週間程前から出しているんだ。

—薪はどこから採って来るの？ ここ国立公園なんだろう？

・いや，国立公園ではなくて国有林なんだ。山から切り出してくるの。すぐそこだよ。明日，一緒にその場所まで行ってみようか。切り出して来たのを割っておくんだけれど，今ごろのはまだまだ湿っていて良く燃えなくてね。冬になれば良いんだけどね。切り出して100キロ位を担いで下りて来るのもいるよ。ウンウンうなりながらね。

—『山溪』なんかによくバイト募集なんて書いてあるけど。

・うん。バイトの給料って，1日3000円なんだ。僕達従業員はそれ以下で3000円にもならないんだ。でも，酒は別として飲み食いはタダだし部屋代もいらなし，街へ下りなければ金を使うこともないから結構貯るんだよ。友達でさ，この間ヨーロッパへ行って来たのがいるんだけれど，持って行った金を闇交換し，結局は出て行った時より多く持ち帰ったのがいるよ。僕もヨーロッパへ行こうと思っているんだ。

—好きじゃあなければやれないね。こういう仕事さ。

・うん。ちょっと特殊な仕事だからね。『山溪』なんか見てきたアルバイトの子って長続きしないんだよね。街でのイメージで来るからね。街ではもっと効率の良いアルバイトあるからね。だからキャンプなんかしている子に声かけると，結構長続きするんだね。山が好きで来ている子が多いからね。それに給料は安いけど一応ガイド出来るくらいの技術教えてくれるからね。

—今年の夏に隣のテント場で2泊したんだけど，バイトでえらく元気印の女の子がいたね。

・えーと，誰かな？ うん。その子，丸顔だったでしょう。あの子，横浜から来た子でね。すごく活動的でいつも動いていたね。そしてよく食べるの。人の2倍は食べて

たね。いつだったかみんなで1000円ずつ出して賭してね。1番食べた者がこのお金もらえるってやったら、すごい勢いで食べるの。そして8000円は彼女がせしめたんだ。それからある時ね、この小屋の隅から隅まで雑巾がけしてって言ったら、本当に全部やった後、布団も700枚以上あるんだけど、それも全部整理してたね。とにかくよく動く女の子だったね。

—この間、立山で8人死んだけれど、八ヶ岳でも遭難なんかするの？

・うん。結構あるんだよ。でも、警察がストップさせてしまって公表しなかったりね。遭難救助の場合、救助隊員の場合は日当2万5千円、危険手当2万5千円なんだけど、僕達は無料のボランティアなんだ。

—どうして同じようにお金出ないの？

・無理だよ。山小屋の人がお金もらうなんてね。雪崩が右、左で起こっている時でも救助に行くんだから命がけなんだけどね。1番最初に救助に出かけたのは高校1年の時だったよ。中学生の時から年をごまかして尾瀬でレンジャーやったり、色々の山へ登っていたからね。ここにもよく来て、小屋の仕事手伝っていたからね。だから、お前ももう大丈夫だろうって言われて高校1年の冬ね。雪崩がかなり起こっていたから本当は恐かったんだけど一刻も早く見つけないと死んじゃうかもしれないしね。

—遭難の連絡はどういうふうになるの？

・家族の人から警察に入る場合と、テントの日付けで分かる場合もあるね。4、5日帰っていないから何かあったな、という具合にね。この間の立山の遭難なんだけど、僕だったら8人も殺さないな。あの状態では3、4人死ぬのはしかたないけどね。

—遭難でさ、発見出来ないことってあるの？ それで遭難者が頭打って記憶喪失になっちゃってどっかで生きてるとかさ

・うん。どっかで生きていてことはないと思うけれど、見つからないってことはあるよ。崩れた岩の下敷になってしまった場合とかね。

—冬山やらないの？（大学生に向かって）

・うん。1度だけいったことあるの。その時、先輩が1人死んだの。それっきり冬山には行ってないんだ。

・僕の友達にもいるよ。高校の時、谷川で落ちて死んだの。死ぬのはしかたないと思うよ。危ないの承知でやっているんだからね。

—テレビとか映画の撮影なんて来るの？

・去年ね、テレビの1時間番組の撮影にきたんだけど、みんなヤラセなんだね。「ここでこういうこと言おうか」なんて相談しながら「綺麗な花が咲いていますね。なんていう名前なのでしょうかね」とか「心にしみこむような光景ですね」とか言いながら撮っているの。それから、ファイト1発の撮影の時ね、ほら、あの写真の所で撮ったのだけれど、ピッケルを氷に打ち込むと氷のかけらがパッと飛び散るでしょう、あれをもっと効果的にするために手の平に氷のかけらを持っていて圧縮空気でパッと飛ばすんだよね。それから、落ちる所を撮っていたんだけど、最初は低いところだったのだけれど、迫力がなくて高いところまで登っていったんだよね。カメラは回しっぱなしでね。そしたら、本当に落っこちちゃったの。もちろんスタントマンだったけどピ

ッケルを顎にさしちやつて血だらけ。

—物はヘリで上げるの？

・うん。重油だけはドラムカンなんでね。食料はポッカ。美濃戸の方へ下り40分、上り1時間の所まで車が入れるからね。そこから40キロから50キロ位のを運んで来るんだ。

—盗難なんてあるの？

・うん。あるよ。お金じゃあなくて物がね。それも夏よりも冬の方が多いんだ。ピッケルなんか特にね。ほら、人の物を盗らないまでもああいピッケルだなあなんておもんことこうとあるでしょう。1本5千円のと5万円のとでは大部、違うからね。それでついでき心で取り替えていっちゃうってやつね。それから1番傑作だったのが、テント張って山から戻ってきたら、テントもキャンプ用品も全てなくなっちゃって、雪の中にテントを張っていた跡が残っていた。というやつね。あれには本当にビックリしたね。

ワインは口当りが良かったので360ml(2合)の瓶が5本またたく間に空になった。話はまだまだつきなかつたが、夕食の準備をするために中止し、3人で手早く準備を終えた。夕食は十分に煮込んだカレーと骨付きのソーセージに野菜、漬物が3種類。旨かったのでおかわりをする人が何人もいた。勿論、私もその1人であった。

10月16日(月) 晴れのち曇りのちアラレ

赤岳鉱泉小屋を6時50分に出発し、30分程で行者小屋に到着する。途中の中山乗越から仰ぎ見る横岳の西壁は実に迫力あるものだ。とりわけ大同心がグググッと迫って来る。あと2カ月もすると一般登山者を決して寄せ付けぬ雪と岩と氷の世界がやって来るのだ。それは先鋭的クライマーの世界だ。

日本を代表したクライマーであった中嶋正宏は24才の誕生日にその短い生涯を大同心で終えたが、遺稿集『完結された青春』を読むと、「人生いかに生きるべきか」「哲学とはなにか」といった問題をニーチェを通して考え、実践した姿が携帯していたノートから読むことが出来る。それは人生において、いかに充実した生活を送るのかであって、無目的に長生きをすることではない、ということに通じている。

行者小屋に水源より引かれている冷水を水筒一杯に満たし、いよいよ地蔵尾根から赤岳へ向けての登山を開始する。

シラビソの森林限界を過ぎると赤茶色の岩がむきだしの岩場となり、100mはあろうかと思われる鎖も登場する。鎖場を通過する時の基本はなるべく鎖に頼らないことである。自らの手足で3点支持を確実にやり、鎖はサポートとして最後の手段である。

先日の寒波の時に降ったのであろう雪があちこちに残っており、踏まれたところではすでに氷となっている。また、しばしば3cm程の霜柱もびっしりと見受けられる。これらの雪は解けることなく根雪となるのであろう。鎖場の連続ではあるが、後ろを振り返れば遠くには北アルプスの山々が、近くには先月に登った北横岳やたてしな山も朝日に映えている。

行者小屋から50分で稜線へたどりつくと可愛いお地蔵さんが西の諏訪側を向いて立っ

ている。稜線上は冷たい西風が容赦なく吹き付け、吹き飛ばされないように注意しなければならない。

西風を避け赤岳石室の東側で10分程の休憩をとる。雲海上の富士のシルエットがとても美しい。また、県界尾根と真教寺尾根がほぼ平行に東側に伸び、紅葉の季節を迎えて緑の中に赤や黄色や橙が入り混ざり錦織りの世界を繰り広げている。

赤岳南峰の1等3角点からキレット小屋に向けて下山を開始する。鉄梯子や鎖がすぐさま現れ、中岳への道を右に分け、西斜面をトラバース気味に下って行くがとにかく風が強い。小石混じりの西風である。竜頭峰を過ぎれば鎖場はあまり登場しないがかなりの急な岩場の連続であり、しかも岩自体が赤茶色でモロイため足元をしっかりと見極めながらの下山である。よけいな神経を使わざるをえない。

右手には中岳から阿弥陀岳が常に見え、阿弥陀岳南稜も赤茶色の岩肌を見せている。双眼鏡を取り出して眺めてみると、赤岳、中岳、阿弥陀岳山頂には人影は見受けられず、遠く横岳山頂に2、3人の人影を確認出来る。

足元ではその可憐な姿で夏山登山者達の心を清らかにしてくれた高山植物達はあと1カ月たらずでやってくる冬の季節に向けての準備を終えたのであろう。あるものは葉を落とし、あるものは紫色の葉へと変色し、あるものは枯草となっている。

青い屋根をしシラビソ樹林に囲まれたキレット小屋へ到着したのは9時40分だった。現在この小屋は無人小屋となって開放されている。

上空はすっかり雲に覆われてしまったが、南方の山々はくっきりと雲海上にそのシルエットを浮かび上がらせている。

10分程の休憩後、登山を再開するがいぜん西風は強烈に吹き付けて来る。高度をますたびに後ろにそびえ立つ赤岳が文字通りの赤茶色の山としてガッチリした姿で徐々に登場して来る。すごい重量感だ。北側から眺めた赤岳は左側がハイマツの緑に覆われているので、あまり重量感を感じさせないが南側からの姿は実にたくましい姿である。

ツルネを登りきると稜線はハイマツとシャクナゲの中を歩くなだらかなものとなり、タカネバラは時々熟した甘酸っぱい赤い実をプレゼントしてくれる。

旭岳の西側をトラバースして、いよいよ権現岳への登りに取り付く。岩場なので足場を確かめながら登って行くが、いよいよ最後の登りと思われる所に長ーい鉄梯子が登場する。権現小屋と青年小屋とのオーナーであった竹内源治さんが設置した源治梯子である。3m位登った所に「上見て登れ、下見るな」の消えかかった看板がぶらさがっているので、なに書いてあるのかな？ 等と考えながら足を出していたら1段踏み外してしまい、一瞬ヒヤッとす。梯子は10m位だろうが、40数段あるので実に長く感じる。ようやく最上段までたどりつき、後は鎖でサポートされて登りつめると「権現岳頂上2718m」などと書いた指標が建っているの、ばかにきゃしゃな指標だなあと思いつつ、カメラをパチリ、パチリ。

さて権現小屋へと向かうと分岐点に建つ指標には、「権現岳1分、権現小屋1分」と書いてある。すると先程のは出鱈目か、と思ったが、なにはともあれ山頂に向かう。今度は先程のきゃしゃな指標とは異なり、高さ1m位の石柱に『権現岳』の文字。さらに5m程上には『金比羅大権現』の石碑と鉄剣。そして誰が置いたのであろうか、さい銭箱に見立てられたプラスチックの箱に5円や10円硬貨がたくさん入っていた。

権現岳からの南側の景色は小淵沢の駅を挟んで甲斐駒ヶ岳やほうおう3山が眼前にそびえ立っている。あの山々にも登ろうと思う。また、手前には明日登る予定の編笠山が優しい山容を見せている。権現岳山頂からの富士の見える風景も見事なものだ。

11時を過ぎたので権現小屋で食事にしようと思うが、吹き上げて来る風をよけて適当な場所を探したが、なかなか見つからない。1時間下れば青年小屋だし、雲行きも何やら崩れそうなので一気に下山し青年小屋で昼食を取ることにする。

編笠山に向かって下山して行く形になるが、右手には西岳が見えて来る。八ヶ岳の1つに数えられている山だ。西岳へは青年小屋から山頂まで往復で1時間30分で行ってこられるので、今日の予定に入れていたのだがアラレが強烈な風と共に横殴りに吹きつけ、視界がほとんどきかなくなってきたため、この状態では西岳に登っても無駄だろうと判断し、登山は中止する。

青年小屋に着き、宿泊手続きをしていると「今晚は雪になるかもしれないね」等と小屋番の20代の女性が言っていた。太陽が出ていないので気温も急速に冷え込んで来ているようだ。靴下を2枚重ねにしても冷たいし、手指がかじかんでしかたがない。部屋の中で吐く息も白くなっている。

ここ青年小屋は廻りに風避けになる木樹がはえておらず、まったくの吹きっさらしなので風当りも相当なものである。小屋番に尋ねると「この頃はいつも強い風が吹き付けているんですよー」とのこと。窓ガラスはたえまなくガタガタ音を出し続け、ビュー、ビューという風の走り去る音も絶えることがない。

10月17日(火) アラレのち晴れ・強風

前夜から吹き止むことなく吹き続けていた風は、やがて雨と変わった。バケツをひっくり返したような大雨が1時から2時と続く。窓を打つ雨音が強烈だ。その雨もアラレと変わったのは午前2時半頃だったろうか。風は止んでは吹き、吹いては止むの繰り返しであり、小屋全体が揺れるほどの風が吹くのでテントの場合だったら完全に吹き飛ばされていたのではなかろうか。

朝、目覚めると廻りは白一色。まさに白銀の世界であり、同時にものすごいガスであった。視界は20m位か？ 編笠山への登山を中止しアラレの中を下山する。